

現代日本語の副詞「なまじ」に関する一考察

呉 珠 熙

1. はじめに

本稿は、現代日本語の副詞「なまじ」について、実例に見られる共起傾向の分析を中心に「なまじ」の統語的特徴について考察したものである¹。

板坂（1971）は、外国語に翻訳不可能とも見られる「いっそ、どうせ、せめて、さすが」などの言葉の中にある日本人独得の論理や価値観を探るものである。その中で「なまじ」はマイナスの可能性を持つ小さなプラスを表す言葉として取り上げられた。

- (1) なまじ英語を知っていると、相手がべらべら話しかけてきて困ることがある。
- (2) なまじ空手の心得があったため、喧嘩を買って出て大怪我をした。
- (3) なまじ親切心を出したら、あとでひどい目に会うぞ。

板坂（1971：24-25）は、上記のような例をあげ、「なまじ」の持っている意味的特徴を「あまり熟達・完成していないである程度しかプラスの状態になると、そのために逆に大きなマイナスの結果をひき起こす、したがって小さなプラスの条件はゼロよりもずっとよくない、という風な、そういう大きなマイ

¹ 「なまじ」の異形態としては「なまじい」「なまじっか」があるが、本稿では「なまじ」を代表形とする。

ナスの可能性を持った小さなプラスがなまじの状態である。」と説明している。

辞書での記述として飛田・浅田（1994：103-104）は、「中途半端で理想にほど遠い状態について慨嘆の暗示がある。条件句を作り、一般には好ましい条件がかえって好ましくない結果を招く様子を表す」と説明している。そして、森田（1989：866）は、「なまじっかな知識ではとてもつとまらないよ。すごく専門的な仕事なんだから」という例について、「知識を持つという点ではプラスの状態だが、それが不十分、中途半端であることは完全なプラス状態ではない。そのためかえって大きなマイナスの結果を引き起こしてしまうわけで、裏を返せば、“僅かなプラス条件は大きなマイナス結果をまねくから、ゼロよりむしろ悪い”という考え方になる。」と述べている。

また、工藤（2016：13）は従来の陳述副詞に相当するものを「叙法副詞」と呼び、考察を加えているが、「なまじ」は叙述副詞の体系の中で、否定的傾向の現実認識的な叙法副詞として位置づけている。しかし、「なまじ」に対する具体的な説明はない。

「なまじ」は、「本来ならプラスの事態がかえって望ましくない事態を引き起こす」という特有の因果関係を表すことで、否定的評価を持つ表現²として注目されてきた。しかし、「なまじ」の統語的特徴についてはあまり言及されて来なかった。したがって、本稿では実例分析を中心に「なまじ」の統語的特徴について考察を試みる。

2. 「なまじ」の共起状況

【表1】は、今回の調査で収集された「なまじ」の用例を共起する文法形式を中心に分類したものである。

本稿では、複文における「なまじ」の共起状況を考察対象とし、「なまじ」

² 浅田（2000：228）

【表1】

「なまじ」と共起する文法形式		用例数(%)		
複文	原因・理由の 従属節	から	38 (8.4%)	171 (37.9%)
		ので	16 (3.5%)	
		だけに	40 (8.8%)	
		ために	27 (5.9%)	
		連用形	20 (4.4%)	
		ばかりに	16 (3.5%)	
		ものだから	9 (1.9%)	
		せいで	2 (0.4%)	
		ゆえ	3 (0.6%)	
	仮定・条件の 従属節	と	52 (11.5%)	86 (19%)
		ば	22 (4.8%)	
		たら	7 (1.5%)	
		ても	5 (1.1%)	
	連体修飾節		37 (8.2%)	37 (8.2%)
単文	なまじのN		48 (10.6%)	80 (17.7%)
	なまじなN		32 (7 %)	
	比較構文	なまじの／なまじなNより	35 (7.7%)	77 (17%)
		より	28 (6.2%)	
		ないほうが	14 (3.1%)	
合計		451 (100%)		

の統語的特徴について分析する。

3. 原因・理由の従属節における共起状況

3-1 共起傾向

「なまじ」と共起する原因・理由の従属節の中で、最も用例数が多かった形式は「だけに」である。中里(1995:88)は、「AだけにB」という文の意味を次の三つに分けている。

①Bは、Aならば当然そうなると思われる事柄や状況を示す。また、Bなのは

当然Aだからという裏付けをする。「…だからさすがに」「…だからやはり」と書き換えられる。

②BはAでなくても成立する（AでなくてもBである）が、Aという条件が加わることで、Bという事柄や状況が強調される。「…だからいっそう」と書き換えられる。

③Bは、Aから予想されるものとは逆の内容を示す。「…だからかえって」と書き換えられる。

下記の用例から、「なまじ」と共起する「だけに」は中里（1995：88）の③の意味を持つものであることがわかる。「なまじ」の「本来ならプラスの事態がかえって望ましくない事態を引き起こす」という逆説的因果関係と「だけに」の③の意味は強い呼応関係を持つと考えられよう。

(4) 家や車を買ってしまうと、負担増で生活が苦しくなっても簡単に売り払うわけにいかず、ローンで身動きがとれなくなります。なまじ景気がいいだけに、かえって深い谷底に突き落とされてしまうのです。(週刊20140131)

(5) なまじ育児本をたくさん読んでいて、靴の履き間違えなどの試行錯誤が、子供の成長過程において持つ意味などの知識も豊富だっただけに、自分の都合で子供を振り回している、という後ろめたさを常に抱いていた。

(アエ20010212)

(6) 対向車と自車のライトの間で歩行者が見えなくなる「蒸発現象」が体感できるトンネルコース。対向車のライトが光ると、歩行者（人形）はすぐ近くにいるのに、ほとんど見えなくなってしまった。なまじライトに照らされているだけに、歩行者の方が「自分の姿は見えている」と思いこむのも怖いという。(朝日20020212)

他に「なまじ」の持つ否定的評価性から、先行研究で結果としてマイナス評

価の事態がくると指摘されている「ばかりに」、「せいで」と共起する用例も見られる。

- (7) 拾って保護してやれる犬はまだ幸せだ。なまじ飼いがいるばかりに、惨めな境遇から救い出せないケースも少なくない。(朝日20041028)
- (8) なまじダイヤモンドが採れるばかりに争いが絶えず、子どもの3人にひとり
りが20歳はおろか、5歳になる前に死んでいく。(朝日20040112)
- (9) かつて日本は「ガラケー」と呼ばれる独自規格の携帯電話が主流だった。
技術は素晴らしいが世界では通用しない。なまじ独自技術があるせいで世界
標準が普及しない。(朝日20181019)
- (10) なまじっか勉強ができたせいで、小学生のころから、特別な子どもとして
注目された。ほかの子どもなら見過ごされるようないたずらも、教師や大人
たちは、決して許してくれなかった。(朝日20080103)

また、前件と後件の因果関係にプラス・マイナスの評価的な意味を持っていない「から」の用例では、「なまじ」が現れる従属節に低評価の取り立て詞「など」「なんか」が用いられている用例が多く見られた。

- (11) 「三五の十八」で三五の積が十五にならない見込み違いのたとえ通りで「なまじ憲法など」というから誤解されたのだ」という愚痴めいた声も聞こえる
ほどだ。(朝日20050623)
- (12) なまじ自信なんかをもって天狗(てんぐ)になるから、ミスをおかす。
しかもミスを認めることができないから、一流企業がつぶれるのだ、というの
である。(朝日20050424)
- (13) この時、野党からは「なまじ政倫審などつくったから、手足を縛られて
しまった」とのほやきまじりの声が漏れたほどだ。(朝日19870729)

以上のように、「なまじ」は原因・理由を表す従属節に現れる場合、後件の事態を「予想したものと逆」の事態、そして、「望ましくない」事態として否定的に評価する「だけに」「ばかりに」「せいに」と共起する用例が多い。また、否定的な評価の意味を持っていない「から」と共起する用例には、低評価の取り立て詞「など」「なんか」が多く見られ、「なまじ」の否定的評価の意味と呼応していることが分かった。

3-2 「なまじ」と共起する原因・理由文の特徴

前田（2009：183）は、「日本語の原因・理由はその意味により、次の三つに分類される。第一は後件に表された事態そのものの原因・理由となっているもの、第二は、後件に表された話者の判断・態度の根拠となっているもの、第三は、後件に表された話者の態度（命令）を実行可能にする要件を表すもの、この三つである。」と述べて、次のような例を挙げている。

原因・理由	昨日は風邪をひいたから仕事を休んだ。
判断根拠	結婚指輪をしているから、彼女は既婚者だ。
可能条件提示	車を呼んであげるから、すぐに病院に行きなさい。

そして、「第三の可能条件提示は「から（ので）」のみの用法であり、原因・理由文は大きく、第一の事態系と第二の判断系の2種に分けられる。」として、原因・理由文の形式を次のように分類した。太字部分は「なまじ」の用例に見られる原因・理由文の形式である。（太字は筆者）

事態系・判断系ともに表せる形式	から・ので
事態系の原因・理由を表す形式	ために・だけに・ばかりに・せいで・ おかげで・もので・ものだから
判断系の原因・理由を表す形式	のだから・からには・以上・からこそ

ここから、「なまじ」は「事態系・判断系ともに表せる形式」と「事態系の原因・理由を表す形式」と共起していることが分かる。

前田（2009：183）は、「論理文としての原因・理由文は事実的な因果関係

を表すが、判断根拠および可能条件提示の場合、後件（主節）はレアリティーが仮説的であり、原因・理由文の典型から外れている」と指摘している。

また、現代日本語文法（2008：124）では、「判断の根拠を表す場合、従属節の事態が主節の事態を引き起こしているのではなく、むしろ、従属節の事態を引き起こすのが主節の事態であるということもある」と述べ、次の例を挙げている。

- (14) 頭痛がしなくなってきたから、薬が効いてきたようだ。
- (15) 左手薬指に指輪をはめているから、結婚しているに違いない。

そして、これらの例は「薬が効いたから頭痛がなくなった」「結婚しているから指輪をはめている」と言えるので、「判断の根拠を表す場合は、従属節の原因・理由と主節の判断内容とで、時間的な前後関係が逆転することもある」と述べている。

先行研究で指摘している判断系の原因・理由文の特徴である「後件（主節）のレアリティー」と「前件と後件の時間関係の逆転」という2点に注目し、「事態系・判断系ともに表せる形式」の「から・ので」の用例を再検討した。例(16)～(20)から、「なまじ」と共起する「から・ので」の用例は、後件の内容が仮説的なものではなく、事実であること、また、前件と後件は時間的な前後関係を持っていることが分かる。したがって、「なまじ」と共起する「から・ので」の原因・理由文は、事実系の原因・理由文であると判断できる。

- (16) 辰彦はなまじ恵まれた境遇にいたから、大きなお金を動かすことが可能で、そのぶん破滅もまた大きかった。(朝日20150215)
- (17) 彼らは英語のテキストに頼らざるを得ない。なまじ英語ができるから、国を出て行く研究者も後を絶たない。(朝日20141126)
- (18) 普通に東京特集をやればよいものを、なまじ植草甚一を担ぎだすからボロ

が出た。(朝日20050213)

(19) 「なまじ労組が強いので、それに頼りきり、地域に入る努力が足りなかった」との反省もある。(朝日19900118)

(20) なまじ大学卒なので、単純作業は嫌うし、「あれも駄目、これも駄目」と、親の言うことなど聞く耳を持たない。(朝日20011108)

ここから、「なまじ」は「本来ならプラスの事態が望ましくない事態を引き起こす」ことを表すという意味的特徴から、前件と後件の間には前後の時間関係があって、前件が後件に表された事態の原因・理由となっている事実系の原因・理由文の従属節に現れるものであると考えられる。

4. 仮定・条件文の従属節における共起状況

4-1 共起傾向

「なまじ」が仮定・条件の従属節に現れる場合、「と」と共起する用例が最も多い。³

益岡(1997:60)は「ト形式の文の基本は、前件と後件で表される二つの事態の一体性を表す点にあると見ることができる。前件で表される事態と後件で表される事態とが継起的に実現するものとしてわちがたく結びついていることを表す」と述べている。そして、「ト形式の文の中心的用法は、非現実の事態ではなく、現実を観察された事態を表現するものである」としている。これに対して、「未然の事態を表す場合」にも前件と後件が継的に実現することを表すが、「前件が実現の可能性が不確実な場合は、仮定表現に近づくことになる」と述べ、「ト形式が仮定表現の側面を持つのは派生的なものであるに過ぎない」と強調している。そして、次のように最も典型的な仮定表現である反事実的仮定表現に全くなじまないこともその根拠として挙げている。

³ 仮定・条件文の全用例の60%

(21) *もしあの時断わっていると、今こんなに苦しんでいないだろうに。

前田(2009:44)は「条件的用法」を「仮定的条件」と「非仮定的条件」に2分類し、「と」は仮說的条件を表すことはあまりないが、出現することがあり、それらは後件が否定的の評価を持つ事態であると述べ、以下のような例を挙げている。⁴

(22) それだけに、津山寛夫から熱心にくどかれると、なんとなくその気になり
そんな自分が怖かった。

また、前田(2009:58)は、「と」の特殊性について、「と」のもっとも中心的な意味は「条件」とは異なるものであり、(中略)後件が生起する「きっかけ」となる事態あるいは状況を示すもの」と述べている。そして、「異主体による動作の連続であるきっかけ用法では、(中略)前件が後件を引き起こすと言う因果関係を持つ(同書:77)」と述べている。

益岡(1997)と前田(2009)の記述から、「と」は主に前件が後件を引き起こすという因果関係を表すものであり、「本来ならプラスの事態である前件が望ましくない事態を引き起こす」という因果関係を表す「なまじ」の意味的特徴と呼応し、仮定・条件文を表す他の形式より「なまじ」と共起する用例が圧倒的に多く収集されたと考えられよう(例23~25)。

(23) **なまじ**金が入るとセールスに騙(だま)されたり、友達におごりまくり、
ゲーム代もすっかりサラ金頼みとなった。気がつけば借金が250万円ほどに
ふくらみ、歌舞伎町に逃げてきた。(週刊20111028)

(24) 人性には《悪》のDNAが間欠的に発現するとしか思えない不思議な反復

⁴ 「仮定的用法」の中には「反事実」と「仮説」、「非仮定的用法」の中には「一般・恒常」「反復習慣」「連続」「きっかけ」「発現」「発見」がある。

性。ちかごろ残虐な犯罪が起きるたびにいわれる「心の闇」は、**なまじ**合理的の光を当てると消えて見えなくなる。(朝日20060205)

- (25) 3泊4日の断食といっても、3日目の朝10時に、最初の食事があるから、センターでの断食は正味2日だ。センターに来る前夜6時に軽めの夕食をとってからだ64時間。40キロカロリーしかない食事だが、**なまじ**食べるとかえって空腹感が増す。(朝日20050122)

また、「と」が仮説的条件の場合には、後件には否定的評価の事態がくるという特徴も否定的評価を表す「なまじ」と共起する用例が多い理由の一つと考えられる(例(26)(27))。

- (26) もう一つの理由は、**なまじ**つかドナーカードを保持していると、いざというとき臓器摘出のみに関心を持たれて、肝心の救命の方がおろそかになるのではないかという不安のせいである。(朝日19981021)
- (27) 小林氏——現代はカナ社会だ。日本語に置き換えて欲しいものもあるが、これらの言葉などは却ってカナのままがいい。**なまじ**翻訳するとやり切れぬ思いが強くなろう。(朝日20090612)

仮定・条件文の用例の中で、「と」と「なまじ」が共起する用例がもっとも多く収集されたことと関連し、同じく仮定・条件文を表す形式の中で「なら」と「なまじ」が共起する例が収集されなかったことについても考えてみたい。

益岡(1993:13-14)は、「ナラ形式の文の特徴は、前件で、ある事態が真であることを仮定し、それに基づいて後件で、表現者の判断・態度を表明するという点にある、とすることができる。このことは、ナラ形式の文においては、レバ形式の文、タラ形式の文に比べて、前件と後件の間の結びつきが弱い一言い換えれば、前件と後件が相互にかなり独立である」と述べている。

また、前田(1997:53-54)は、「なら」の特殊性について、下記の例から

「基本的に「なら」以外の接続辞が前件の完了を条件の中に含むのに対し、「なら」にはそれがない」と述べている。

- (28) A 北京に行くなら陳先生に会うといいよ。
→陳先生は北京または東京にいる
B 北京に行ったら陳先生に会うといいよ。
→陳先生は北京にいる
- (29) A ソウルへ行くなら毛皮のコートを買うでしょう。
→買い物はソウル又は東京です
B ソウルへ行けば毛皮のコートを買うでしょう。
→買い物はソウルです

そして、有田（1993：67）は「なら」の特有な意味を「後件の結論を導くための「根拠」を表すと指摘している。

以上から、「なら」は「と」「ば」「たら」と異なって、前件と後件の間に前後の時間関係がないということが分かる。そして、「なら」は後件の事態が成立する条件を表すものではなく、後件の判断の根拠を表すものであると言える。

3節で「なまじ」と共起する原因・理由文は事態系であることを確認した。つまり、「なまじ」は「本来ならプラスの事態が望ましくない事態を引き起こす」という意味的特徴から、前件と後件の間に前後の時間関係があって、前件が後件に表された事態の原因・理由となっている事実系の従属節に現れるものである。このような「なまじ」の意味的特徴は、「後件の判断根拠を表すため、前件と後件の間に前後の時間関係を持っていない」という「なら」の特徴と相容れないものであるため、「なまじ」と「なら」が共起する用例が収集できなかったと考えられる。

次に、「なまじ」が「ば」、「たら」と共起する場合は、「仮説的用法」の用例が多く、前件が後件の成立の条件であることを表す。そして、「ば」の場合は、

「Aがaすれば、Bもaする」(例30)、「Aすればするほど」(例31)、「～ようとすれば」(例32)など、「ば」特有の文型が多い。

- (30) 原油など資源価格の高騰によるコスト増を人件費で吸収している現状では、**なまじ**生産が増えれば働く時間が増えるだけ。国民はそういう景気回復を求めているのではない。(朝日20090918)
- (31) よく知らない国なら、かえって言い切ることがやさしいかもしれない。**なまじ**関係があって、知っていればいるほど「あの部分は好きだが、ここは嫌いだし」と、迷うのが人情だ。(朝日19900801)
- (32) **なまじ**手助けしようとすれば、しかりとばされるだろう。(朝日19900428)
- (33) 「オペラは3回、コンサートもあんまり行ったことはありません。好き嫌いというより、そういう機会がなかったからね。でも、**なまじ**、なまはんかな知識を持った文化人が文化村の社長をしていたら、文化活動をする人はやりにくいと思いますよ。私が文化人でなくて、かえっていいんじゃないですかね」(朝日19900106)
- (34) 闘牛、錦鯉、小千谷縮——。小千谷市には誇れるものがたくさんある。「**なまじ**大ききところと合併なんかしたら、影が薄くなっちゃうんじゃないかなあ」(朝日20150426)

4-2 「なまじ」と逆接条件形式「ても」

現代日本語文法(2008:93-94)は「ある事態が、別の事態を引き起こすことがある。こうした関係を条件文と言う。そして条件文には次の4タイプがある。」と説明している。

	順 接	逆 接
仮 定 的	酒を飲む <u>と</u> 頭が痛くなる	酒を飲ん <u>でも</u> 痛くならない
事 実 的	酒を飲ん <u>だ</u> ので頭が痛くなった	酒を飲ん <u>だ</u> のに頭が痛くならなかった

順接条件文は、「酒を飲む」ことが「頭が痛くなる」ことを引き起こすとい

う関係にある。

また、逆接条件文は、2つの事態の因果関係が予測に反して、成り立たないという関係を表している。

「なまじ」は「本来ならプラスの事態が望ましくない事態を引き起こす」ことを表すものであることから、順接条件文の従属節に現れるものである。しかし、逆接条件文の「ても」形式と共起する用例（5例）が収集された。少数ではあるが、「なまじ」の意味的特徴からすると例外と考えられるので、「ても」と共起する用例を検討してみたい。

(35) 悩みの多くは聞いてもらえば解決するものだそうだ。だが、陰気な話に付き合うのはうっとうしくて真っ平だとする人が多い。誰も相手にしてくれなければ仕方があるまい。思い切って精いっぱいよくよすることだ。**なまじっか**頑張って強いふりをしてみせても、ストレスがたまるばかり。ひよっとすると、「くよくよ」はストレス解消の一つの方法じゃなかるうか。

(朝日20120205)

(36) AIG ではボーナス返上の動きもあるが、同氏は堂々と受け取るかわりに、今の世界金融危機で本当に被害を受けた人たちを救済する奉仕団体に全額寄付すると書き、**なまじ**返上しててもその分を政治家が有効に活用してくれるとは思えない、といった政治不信感もにじませている。(朝日20090414)

(37) 私が営業職を始めて十数年、ご多分に漏れずというか、他の業界に先駆けての不況で、じっと我慢のこの数年。お客様の所に行っても良い話は皆無で、**なまじ**オーダーを取ってても、回収が終わるまで冷や冷や。極小企業の一介の営業職がはねのけられるような生やさしい不況ではない。(朝日19990302)

現代日本語文法（2008：149-150）は「「ても」はテ形にとりたて助詞「も」がついたものなので、「も」の並列の意味を反映して、テ形の並列を表すものがある。これは条件的関係の否定ではない。」とし、次の例を挙げている。

(38) - 4 を自乗しても16になる。

この場合、「- 4 を自乗すれば16にならない」という予測はない。この文は、次の2つの順接条件文の並列を表す文であると説明している。

(39) 4 を自乗すればも16になる。

(40) - 4 を自乗すればも16になる。

そして、この2つの文を1文にすると、次のようになるので、「ても」には、条件を並べるという機能があると述べている。

(41) 4 を自乗すれば／しても16になるし、- 4 を自乗しても16になる。

「なまじ」と共起する「ても」の用例の場合も次のように条件を否定する逆接条件文ではないことが分かる。つまり、(35)の用例には①のような予測はなく、②の順接条件文と同じ解釈ができると考えられる。

(35) **なまじ** か 頑張って強いふりをしてみせても、ストレスがたまるばかり。

→①**なまじ** か 頑張って強いふりをしてみせると、ストレスがたまらない。

→②**なまじ** か 頑張って強いふりをしてみせると、ストレスがたまるばかり。

つまり、ストレスを解消するためのA、B、C…という試みがすでに行われたが、解決できない結果が続いている状況が前提になっていると考えられる。

(42) A をするとストレスがたまる。

B をするとストレスがたまる。

C をするとストレスがたまる。



なまじっか頑張って強いふりをしてみせても、ストレスがたまるばかり。

したがって、「なまじ」と共起する用例に見られる「ても」は逆接条件を表すものではなく、順接条件文の並列用法であるため、「なまじ」と共起が可能であると言える。

5. 連体修飾の場合

「なまじ」が連体修飾節に現れる用例は37例あった。

- (43) **なまじっか**腕に自信のある人は面打ちに向いていない。自分勝手に彫ってしまうからだ。(朝日20020718)
- (44) 「腕だけやなし、身体の筋力を使ってこがな、すぐに疲れてしまうぞ」と教えるが、**なまじ**腕力が強い彼は、腕力だけでこぐ癖が直らない。
(朝日20020514)
- (45) 「**なまじ**絵をかじった人は、長続きしない。もっと自由にかきたいと思うからでしょう」(朝日19940314)

連体修飾の場合は、連体修飾節の内容が「本来ならプラスの事態」を表し、「なまじ」はその「プラス属性を持つ主体であるにも関わらず、結果はよくない」ということを表している。したがって、連体修飾節に現れる「なまじ」の場合（【Ⅰ】）も次のように、原因・理由文（【Ⅱ】）、仮定・条件文（【Ⅲ】）における「なまじ」と同じく類型化できる。

- | | | | |
|-----|-----|--------|---|
| 【Ⅰ】 | なまじ | PであるNは | Q |
| 【Ⅱ】 | なまじ | Pだけに | Q |

【Ⅲ】 なまじ Pすると Q

P：本来ならプラスの事態

Q：望ましくない事態

6. 「なまじ」の論理構造

第3節～第5節まで「なまじ」が複文の従属節に現れる用例を中心に、共起傾向を分析した。そして、先行研究で指摘された「本来ならプラスの事態がかえって望ましくない事態を引き起こす」という「なまじ」の持つ特有の因果関係が共起傾向に反映されていることが確認できた。しかし、今回収集した「なまじ」の用例の中には、「マイナスの事態がかえって望ましい事態を引き起こす」という用例が19例あった。

- (50) ロシアのハバロフスク・テレビラジオ公社制作の人気ニュース番組を、日本語に吹き替えるだけでそのまま放映している。**なまじ**こちらで編集してないだけに、ロシア極東の生々しい暮らしぶりがうかがえる。
(朝日19920416)
- (51) しかるに著者は、**なまじ**学者でないだけに庶民的な視点から冷静に事実を観察していて、共産党への率直な批判も随所にうかがえる。(朝日19940605)
- (52) 『最初の人間』はカミュが交通事故死したときかばんの中に見つかった遺稿。**なまじ**つか手を入れる時間がなかっただけに、私たちにまっすぐ届く透明な精神性と地中海の光。(朝日19961222)
- (53) 「古い商店街で、**なまじ**つか基盤整備が進んでいなかったことが幸いです。駄菓子屋の店番は輪番制でサラリーマンの奥さんらにも加わってもらっています」(朝日19970408)
- (54) 素人の発想は、えてして思い込みとひとりよがり誇大妄想に満ちている。しかし、**なまじ**つか他人の論文を読んでないだけに誰も気づかない斬新さ

を秘めていることもある。(朝日20050410)

これらの例も「マイナスの事態がかえって望ましい事態を引き起こす」という「逆説的な因果関係」を表すという点においては、先行研究で指摘されている「なまじ」の論理構造から外れるものではないと考えられる。ただ、「本来ならプラスの事態がかえって望ましくない事態を引き起こす」という「なまじ」の用例が「プラスがマイナスになる」ことから否定的評価性を表すのに対し、「マイナスの事態がかえって望ましい事態を引き起こす」という「なまじ」の用例は、「マイナスがプラスになる」ことから否定的評価性はなくなり、肯定的評価性を表していると解釈できる。つまり、両方とも「なまじ」の持つ「逆説的な因果関係」という論理構造は同じだが、評価性の面では対照的な関係にあると考えられる。

7. まとめ

本稿では、用例分析を中心に現代日本語の副詞「なまじ」の統語的特徴について考察を行った。具体的には、複文の従属節に現れる「なまじ」の用例を考察対象にし、原因・理由文、仮定・条件文、連体修飾節の各形式と「なまじ」との共起傾向を分析した。

原因・理由文の場合、前件が後件の「判断根拠を表す」ものか、「成立の原因・理由を表す」ものかによって、前者を「判断系」、後者を「事態系」に二分することができる。「なまじ」は「事態系」の形式である「だけに」「ために」「ばかりに」などと共起する。また、「判断系」も「事態系」も表すことができる「から」「ので」の場合でも「なまじ」と共起する用例は「事態系」であることが分かった。また、仮定・理由文の場合、「なまじ」は「と」と最も多く共起する。「と」は仮説的にはあまり用いられず、主に前件が後件の事態を引き起こす「きっかけ」を表すことから「なまじ」と意味的に呼応関係にあり、

用例が多く収集されたと考えられる。また、「なら」は前件が後件の判断根拠を表すものであり、前件と後件の関係性が弱いという特徴から「なまじ」と共起することが難しいと考えられるし、用例も収集されなかった。また、「ても」が逆接条件ではなく、順接条件文の並列を表す場合は「なまじ」と共起することが確認できた。そして、「なまじ」が連体修飾節に現れる場合も原因・理由文、仮定・条件文と同じく類型化できることから、複文における「なまじ」の文型は次のように整理できる。

なまじ P {だけに／すると／であるNは} Q

P：本来ならプラスの事態

Q：望ましくない事態

最後に、「マイナスの事態がかえって望ましい事態を引き起こす」場合にも「なまじ」が用いられるが、これらの用例は「本来ならプラスの事態がかえって望ましくない事態を引き起こす」という「なまじ」の逆説的な因果関係と同じ論理構造を持つが、評価的な面からは対照的に肯定的評価性を持つものと考えられる。

今回の考察では、「なまじ」が複文の従属節に現れる用例を対象にし、考察を行った。単文における「なまじ」の統語的特徴についての分析は今後の課題にする。

◀ 参考文献 ▶

- 浅田秀子（2000）「修飾語の意味に伴う評価性—現代「副詞」987語のイメージを中心に—」『日本語 意味と文法の風景』山田進、菊池康人、初山洋介編 pp. 237-255 ひつじ書房

- 有田節子 (1993) 「日本語の条件文と知識」『日本語の条件表現』益岡隆志編 pp. 41-71 くろしお出版
- 板坂 元 (1971) 『日本人の論理構造』講談社新書
- 工藤 浩 (2016) 『副詞と文』ひつじ書房
- 中里理子 (1995) 「「だけに」「ばかりに」の接続助詞的用法について」『言語文化と日本語教育』9 (水谷信子先生退官記念号) pp. 87-98 凡人社
- 中西久美子 (1995) 「ナド・ナンカとクライ・グライー低評価を表すとりたて助詞一」『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』宮島達夫、仁田義雄編 pp. 328-334 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第11部複文』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』pp. 103-104 東京堂出版
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志 (1993) 「日本の条件表現について」『日本語の条件表現』益岡隆志編 pp. 1-20 くろしお出版
- _____ (1997) 『複文』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』p. 866 角川学芸出版

◀資料▶

- 「朝日新聞記事データベース」(<http://database.asahi.com/library2/main/start.php>)
- 〈新聞〉朝日新聞1985.01~2018.11
- 〈雑誌〉『週刊朝日』2000.04~2018.11
- 『アエラ』1988~2018.11

◀用例出典▶

- (朝日××××××××) : 朝日新聞、××××年、××月、××日
- (週刊××××××××) : 『週刊朝日』、××××年、××月、××日
- (アエ××××××××) : 『アエラ』、××××年、××月、××日

A Study on the Modern Japanese Adverb *Namaji*

Juhui OH

The current study explores the syntactic characteristics of the modern Japanese adverb *namaji*, mainly through an analysis of examples. More specifically, the study looks at examples of *namaji* appearing in the dependent clause of complex sentences to understand the cooccurrence trends of *namaji* and forms such as cause-reason, supposition-conditional, and adnominal clauses.

In cause-reason clauses, *namaji* cooccurs with *dakeni*, *tameni*, *bakarini*, in which the dependent clause expresses the cause and reason for the main clause. In supposition-conditional clauses, *namaji* cooccurs most often with *to*; many of such examples were collected because the *to* is not often used for hypothetical clauses, but expresses the cause that the dependent clause generates the main clause, which creates semantic agreement. Because with *nara* the dependent clause shows the reasoning support for the main clause, in addition to the fact that the relationship between the main and dependent clause is weak, it did not cooccur frequently with *namaji*, and no examples were collected. Also, when *tara* displays a parallel of additive conditional and not adversative conditional, it can cooccur with *namaji*. *Namaji* in adnominal clauses can also be typified in the same way as in cause-reason and supposition-conditional clauses.

Lastly, *namaji* is also used when minus incidents in the end cause favorable incidents. Such an example has the same logical structure as the paradoxical cause-and-effect relationship of *namaji*, but it has a positive evaluation.

The current study looked at examples of *namaji* in complex sentences. Future research will explore syntactic characteristics of *namaji* in simple sentences.